

ジョージ・ベンジャミン(Sir George William John Benjamin)は、1960年、ロンドンに生まれ、長い歴史を誇る名門、ウエストミンスター・スクールに学んだ。その同窓名簿には各界の名士が名を連ねている。音楽の分野でも、古くはH.パーセル、あるいはA.ボルトらはベンジャミンの先輩にあたり、また、I.ボストリッジ、J.アンダーソンは後輩ということになる。

パリ音楽院でO.メシアンに師事し、さらに、ケンブリッジ大学で音楽を専攻、ベンジャミンはA.ゲールの下で研鑽を積んだ。在学中、同大音楽協会の委嘱により書かれた管弦楽曲『平らな地平線に囲まれて』が1980年に初演され、さらに、同年8月にはBBCプロムスでも再演されて脚光を浴びる。<sup>じらい</sup>爾来、彼は早熟の天才として内外で大きな注目を集めに至った。日本初演は、サントリーホールのオープニング・シリーズ、1986年10月、武満徹監修による「国際作曲委嘱シリーズ」の第1回演奏会において、武満の『ジェモー』世界初演に先立ち、ドビュッシーの『牧神の午後への前奏曲』と共に行われている。

初来日は1995年。東京でヴェーベルンについての講演を行ったほか、ピアノ作品が日本初演された。さらに、明治神宮における武満の『秋庭歌一具』公演にも接した。夕闇の中での稀有の体験、そして終演後、病み上がりの作曲家と撮ったスナップは、ベンジャミンにとって掛け替えのないものとなった。その後も、武満徹作曲賞の審査員を務めるなど、武満との関わり、彼への尊敬の眼差しは、変わらない。

初期にはピアニストとしても活動したほか、近年は指揮者としても、ベンジャミンは、自作はもとより幅広いレパートリーで卓抜の音樂性を發揮している。一方、主軸たる作曲の分野では、寡作である。80年代半ばから90年代にかけての空白の時期を考慮に入れても、間も無く還暦を迎えるとする彼の作品リストは、思いの外短い。それらの多くは、一見、比較的小規模と分類されるものばかり。しかし一曲一曲はいずれも、極めて緻密に描かれた

細密画のごとき密度を持つ。

指揮、そして作曲の両面において、彼の大きな転機ともなったのは、90年代末、ブリュッセルのモネ劇場におけるドビュッシーの『ペレアスとメリザンド』だった。この名門歌劇場の指揮台にベンジャミンを招いたのは、旧友、インテンダントだったB.フォクルール。オルガニストとして知られる彼は、一方、劇場や音楽祭の運営においても<sup>うつわん</sup>辣腕を振るった。モネの音楽監督に大野和士を抜擢し、また、エクサンプロヴァンス音楽祭の総監督としても、大野との共同作業で大きな成果をあげたことは周知の通りである。

ベンジャミンの『リトゥン・オン・スキン』は、他ならぬフォクルールの依頼が発端となり、ブリュッセル時代から永らく計画が温められ続け、2012年、エクサンプロヴァンス音楽祭においてようやく世界初演を迎えるところとなったオペラである。

若き日のキャリアをメシアンの最後の高弟としてスタートさせたベンジャミンは、師が尊敬してやまなかたドビュッシー、中でも最高傑作と看做していた『ペレアス』のタクトを執り、やがて、自らの『ペレアス』とも言うべき作品に取り組んだ。『リトゥン・オン・スキン』は、ベンジャミンのこれまでの芸術家としての活動の一つの集大成である。

初の本格的なオペラの創作にあたり、ベンジャミンのパートナーとなったのは、2006年に初演された室内オペラで既にコンビを組み、意氣投合していた英国の劇作家、しばしば、その作風を「実験的」などとも評されるマーティン・クリンプ(1956~)である。2人は、オペラの題材として、中世のトルバドゥール、ギヨーム・ド・カプスタンにまつわる物語を選んだ。様々なかたちで伝承され、G.ボッカチオの『デカメロン』やスタンダールの『恋愛論』をはじめ、E.パウンドなどによっても描かれた「心臓を食べた話」をモティーフとして、ストーリーの大きな軸となるのは、裕福な領主とその従順な妻、そして、書物制作のために招き入れられた少年の間の三角関係である。クリンプとベンジャミンは、領主と妻、妻と少年という2つの線のみならず、領主と少年の関係性をも浮かび上がらせる。自尊心と権力欲、支配欲の強い領主は、学はないものの聰明な妻、そして才能豊かな少年

と対比され、当初、些かエクセントリックにも見える。が、やがて、妻が内なる自我と自らの生、そして欲望に目覚め、また少年の本来の姿が顕になっていくにつれ、その構図はダイナミックに変容する。

書物が羊皮紙の上に一筆一筆丹念に記される貴重で高価なものだった時代——作品のタイトルは、もちろん、その「羊皮紙に書かれた」物語を意味する。

12世紀と現代、オペラは800年の時を隔てた2つの時代を行き来しながら進んでいく。その橋渡し役となるのは、3人の天使たちである。彼らは、現代の視点から語り手的な役割を担うと共に、古の物語の登場人物ともなる。

クリンプしたたかが認めたのは、旧来の台本リブレットではなく、「テクスト」である。

「どういう意味ですか、と少年は言う」

「違います、と女は言う」

登場人物たちは、折に触れ、役を演じていることを敢えて改めて意識させる。アニエスは、当初、「女」と呼ばれる。彼女が「私は『女』ではない。アニエスです」と口にするのは、第1部の結び、第6場において、少年と結ばれるに至ることである。

独特的の語り口は、精密かつ巧みに構成された音楽と一体となる。件の第6場、「愛は絵ではない。愛は行為。」呟くような、しかし情感に満ちたアニエスの声、最低域の管とドラム、そしてクロタルが、魅惑的な色合いを紡ぎ出す。遠い中世への憧れと、生々しく描かれる愛憎、欲望の交錯は、昔話の幻想の世界にとどまらず、むしろ極めてアクチュアルな肌合いをも有し、妖艶な香氣を放つ稀有の小宇宙へと昇華する。

全曲は、全3部15場、スコアによれば合わせて90分ほど。煉瓦を一つ一つ積み上げていくかのように構成されたベンジャミンにとっては最大規模の作品だ。エクサンプロヴァンス音楽祭、ネーデルラント・オペラ、トゥールーズ・キャピトル劇場、コヴェントガーデン王立歌劇場の共同委嘱により、2009年から12年にかけて作曲。世界初演は、上述の通り、2012年7月7日、エクサンプロヴァンスのプロヴァンス大劇場において、

Ch.パーヴェス、B.ハンニガン、B.メータらのキャスト、ケイティ・ミッセルの演出、作曲家自身の指揮するマーラー室内管弦楽団により行われた。その大成功の波は、各地での度重なる再演により瞬く間にさらに広がり、同時代オペラの最高傑作の一つとしての評価は不動のものとなっている。

管弦楽は、8型の弦、いわゆる2管編成にピッコロやバス・クラリネット、コントラバス・クラリネット、グラスハーモニカ、バス・ヴィオラ・ダ・ガンバ、マンドリン、タイプライターなどを含む多彩な打楽器、とコンパクトでありながら色彩に富んでいる。大音量の破壊的とも見える箇所でも常に透明感を湛え、一方、言葉のニュアンスが存分に生きた声楽と一体となり、繊細にして夢幻的かつ艶やかな表現が溢れる書法が随所に輝くスコアは、ベンジャミンの音楽のエッセンス、その資質の最良の部分の結晶である。

3 Fl (2 Picc / A-fl) / 2 Ob / 2 Cl / Bs-Cl (Cl) / CB-Cl / 2 Fg (C-Fg) – 4 Hrn / 4 Trp (Picc-Trp) / 3 Trb / Tub – 4 Perc (I=Glock / 2 Crotal / 3 Tubular Bells / 2 Small Timp / 3 Mini-Tablas / 3 Bongos / 4 Temple Blocks / Small Claves / Pebbles / Small Suspended Cym / Small Tri II=Steel Drum / 3 Mini-Tablas / 2 Snare Drums / 3 Mokubios / Maracas / Small Clash Cym / 2 Suspended Cym / Sleigh Bells / Typewriter III=3 Bongos / 2 Tenor Drums (one with attached untuned cowbell) / Guiro / Sandpaper Blocks / Maracas / Whip / Large Suspended Cym / Tam-Tam IV=Vib / 5 Tuned Cowbells / Gong / Very Small Suspended Cym / Large Clash Cym / Sleigh Bells / Maracas / Pebbles / Tumba / Bass Drum) – Hrp – Glass Harmonica – Bass Viola da Gamba – 2 Mandolins – Strings (8-6-6-4)

初演： 2012年7月7日 プロヴァンス大劇場  
ジョージ・ベンジャミン指揮 マーラー室内管弦楽団  
演出： ケイティ・ミッセル  
プロテクター： クリストファー・パーヴェス  
妻・アニエス： バーバラ・ハンニガン  
第1の天使／少年： ベジュン・メータ  
第2の天使／マリア： レベッカ・ジョー・レーブ  
第3の天使／ヨハネ： アラン・クレイトン  
委嘱： エクサンプロヴァンス音楽祭、ネーデルラント・オペラ、  
トゥールーズ・キャピトル劇場、コヴェントガーデン王立歌劇場